
戦争推理

神風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦争推理

【Zコード】

Z0438B

【作者名】

神風

【あらすじ】

突如もたらされた「戦争開始」の合図。姿の見えない敵。せかされる反撃命令…始まったのは「国家の平和」と「全面戦争」と「人々の命」を賭けた黒い推理ゲームだった。

総理と凶報（前書き）

登場する人物名・団体名・国家名などは全てフィクションです。 実際のものとは一切関係ありません。

200X年 10月 14日 土曜日

日本時間午後7時

「しかし、疲れたな・・・」

革張りの見るからに高級そうなソファにびっしりと腰を掛けると、ため息をつくように吐き捨てた。

ここは大韓共和国最高級ホテルの最上階スイート・ルーム。

そこに腰掛けるのは日本の新総理大臣・安塚宗次ヤスヅカ・ソウジだ。

政権与党である自由立憲民主党の総裁選挙において圧倒的過半数によりつい一週間前に自由立憲民主党総裁にして日本国内閣総理大臣に就任したばかりの、48歳という総理大臣にしてはまだ若い優男だった。

安塚は総理大臣になつてから息をつく暇もなく、前首相時代からこじっていた大陸諸国との関係を修復するために今現在日本の隣国であるこの大韓共和国に首脳会談のために滞在している。

今はその首脳会談を終えてこいつやつてホテルで一日の疲れを癒して

いふところだ。

肝心の首脳会談の方はといづと、はつきりして大した収穫はなかつた。

今まで両国間の最大問題であつた歴史認識問題や領土問題については双方とも従来の主張を繰り返し終始平行線のまま。

唯一意見が一致したのはいつまでも対立やにらみ合いを続けているのではなく、価値観を共有する民主主義国家同士として友好関係を築かねばならないということだけだつた。

結局最後に「両国の発展と友好の為に建設的な関係作りを目指す」というなんとも抽象的な共同声明だけを出して会談は収穫の無いま終わつた。

「わざわざ飛行機で飛んできて、その結果が形だけの共同声明か・・・」

なにか、空振りを振つたような虚無感が安塚を支配していた。

今度は本物のため息をついて、首もとのネクタイを邪魔そうに緩める。

あんな派手な記者会見や首脳会談をしておいて結果はゼロだったのだ。典型的なA型血液の持ち主である安塚には国際政治というものがここまで非効率的で鈍重だとは実感がなかつた。

「仕方ありませんよ、総理」

顔をしかめる安塚に、側近の一人である政策秘書の藤沢彰正^{フジサワ・アキマサ}が慰めの言葉をかける。

「わが国と韓国（大韓共和国）との間に横たわっている問題は単純ではありません。歴史問題が領土問題に、領土問題が歴史問題に、そして歴史問題と領土問題が民族問題にもつれ合って一朝一夕に解決できるようなものでは無くなっているのですから。そんな中で首脳会談が実現しただけでも成果ですよ」

藤沢は60歳、安塚よりも年上である。一世議員である安塚の父親（もちろんこちらも政治家）に秘書として仕え、その後安塚が政治家になることを決めた日に政治家を引退していた安塚の父親から「息子をよろしく頼む」と頼まれ安塚の秘書となつた。

経験豊富で万事冷静、温和な性格から周りからずいぶん慕われている人間だ。

周りからの評価も高く、政治家として安塚の父親の後継者の役割を担うのは藤沢ではないかとも言われていた。

しかし、安塚の父親が後継者に指名したのは藤沢彰正ではなくその息子安塚宗次だった。

選挙基盤も安塚が継いだ。藤沢にはおこぼれさえなかつた。

そのため現在も藤沢は自分を後継者に選ばなかつた安塚の父親に、そしてまんまと後継者になつた安塚自身に恨みを持っているのではないかと噂されている。

しかし、実際の安塚と藤沢の関係は政治家と秘書としてとてもよく

いつていた。

二人の近い所にいる人間たちにはそういうた噂はやはり噂でしかなく、マスコミが好きなと太話にすぎないと見られている。

実際、二人は今でも家族ぐるみの付き合いをしている仲だ。

「首脳会談が実現しただけでも成果、か。・・・でもマスコミは今回結果に黙つていないので」

「マスコミは政府を批判するのが仕事みたいに思つてますから、いつものことですよ」

藤沢は柔らかな笑顔を浮かべて、スウィート・ルームのカーテンを開けた。

最上階の窓から見える首都カンジョウの夜景は絶景だった。

「こつもの」とですまされることじゃない

安塚は藤沢とは対照的に、しかめた顔で窓を見つめる。

「事態は憂慮すべきものだ。わが国と韓国が連携を取れる前途はいつまで立つてもたたない。今、我々の目の前に迫っている問題には両国が一致協力して取り組まなければならないというのにいつまでも立つても我々と協力しようとしない。このままではイル・クムファの思う壺だ」

安塚の声には焦りと怒りが籠っていた。

イル・クムファといふのは日本の近隣国の一つである北東民主主義人民共和国の総書記、つまり最高指導者である。

現在、日本と北東民主主義人民共和国には国交はないうえに深刻な対立状態にある。

北東共和国が起こした日本人連れ去りの「邦人拉致事件」をきっかけに両国は事実上冷戦状態に突入した。

さらに最近になって北東共和国がミサイル乱射事件を引き起こしたものだから事態はいつそう悪化している。

北東共和国とその指導者イル・クムファは明確に日本の、いや北東アジアの平和を乱す脅威だった。

「イル・クムファを押さえつけるには各国が共同で圧力をかねばならないのに、それができない」

安塚は悔しそうに唇をかみ締めていたが、藤沢はあくまで笑顔を絶やさなかつた。

「Jの国にはこの国の事情があるのでしょう。総理、焦つてはいけない。じっくりと機会が転がつてくるのを待つのです、焦りは自らをつまづかせる」

藤沢は諭すような口調でそういった。

安塚は政治家として経験が少ないせいか、功を焦るきらいがあるのだ。

そして焦りに任せてやつてきたことは今まで例外なく空振りに終わっている。

安塚は総理大臣としてまだ少し未熟だった。

まあ、実際のところ未熟でない総理のほうが珍しいのだが。

「ああ、そうだ総理。明日は中央劇場で民族舞踊をご覧になるのでしょうか？でしたら事前に予備知識でも調べていたらどうですか、資料もつてきますよ」

さらっと話題を変えた初老の側近秘書に向かって、安塚は「愚痴つて悪かったな」というような何とも言えない表情をしてダルそうに目を閉じた。

「いや、いいよ。それより飯が欲しい」

「分かりました。ではルームサービスを」

部屋の受話器を取りに行く藤沢を視界の端に捉えながら、安塚はソファから立ち上がりもつと良くな夜景を見ようとした。

と、その時、藤沢の携帯が少しつるさい電子音を鳴らした。

藤沢は少し慌てて携帯を取り出し電話に出ると、何回か相槌を打つて安塚に向き直った。

そして話し終わると今までの笑顔は一体何処へ、藤沢の顔には硬い表情が張り付いている。

「どうした、何があつたのか？」

藤沢の表情をみて安塚は一気に不安になつた。藤沢のあんな表情は今まで見たことなどなかつたのだ。

藤沢は重そうに口を開く。

「総理。今さつき日本の新潟市内にミサイルの着弾が確認されたそうです。直前にレーダー確認されたミサイルの機影は北東共和国の方向から飛んできたと…死者などの詳しい被害状況は不明です」

「何！？」

安塚は思わず大きな声を出した。

「それは北東共和国が打つてきたってわけか？！日本の、それも市街地に？！」

藤沢の口からはさらなる凶報が続く。

「それともう一つ、これはアメリカからの情報ですが、北東人民共和国軍総司令部が軍の全部隊に戦争の準備を命令したそうです」

安塚の頭の中がいきなり真っ白になつた。

突然のミサイル攻撃、

そして戦争準備を進める敵対国家。

想像もしていなかつたことがいきなり訪れて、つい今さつき過去の

こととなつたのだ。

頭の理解が追いつかなかつた。

「信じられる」

そして、ここから長い長い国家の命運を賭けた「推理ゲーム」が始
まったのだが、

安塚自身はそんなゲームが始まっていたことも、自分がこの時をも
つてそのゲームの盤上に立たされたことに気がついていなかつた。

総理と凶報（後書き）

もちろん東北民主主義人民共和国は北朝

がモデルです

外務大臣と特別安全対策委員長

200X年 10月14日 土曜日

日本時間午後7時10分

「なんでもないことが起きたな」

首相官邸に向かう車中で、安塚内閣外務大臣・瀬戸川恒雄は重い口調でそう言った。

瀬戸川のもとに、「新潟市内にミサイル着弾」との報告が上がったのはつい20分ほど前のことだ。

ちょうど瀬戸川が海外に留学している娘と久しぶりに電話で連絡を取っている時だった。

「ホントに、面倒なタイミングで打ってくれたわ…」

報告があつた時は頭が混乱して言葉もろくに話せ無かつたが、今は随分落ち着いている。

そして非常事態とは言え、久しぶりの娘との楽しい会話を妨害されたのは実に悔しかつたし恨めしいことだった。

(ホントに恨むよ、イル・クムファ…余計なことしてくれて)

今回の事件が北東共和国によるものだったかはまだ明らかでなかつたが、瀬戸川は北東共和国の最高指導者であるイル・クムファに恨み言をたれた。

実際、ミサイルを撃ち込んでくる連中などあの国以外には考えれなかつた。

人民労働党による一党独裁、先軍政治、軍備拡張、軍国主義、

北東共和国についていい噂を聞いたことなど一度もない。

そういうおかしな国だつたのだ。

今回のような事件がいつか起ると喧伝している人間はいくらかはいたが、平和ボケの世間は本気にしなかつた。そしてそれは瀬戸川はじめ、内閣の面々も同じだ。

あの国はそんなことをやつてもおかしくないと分かつていながら、どこかでそんな事実から目を背けて「そこまで馬鹿じやないだろ」と自分達に都合のいい希望的観測をもつっていた。

認識が甘かった。自分達は馬鹿な事をしていたのだ。

ただ、事前に正しい認識を持っていたら今回の事件は防げたというものではないのだ、ということが唯一瀬戸川の慰めになつていた。

「瀬戸川先生、着きました。官邸ですよ」

「ん？ああ、」苦労むん

瀬戸川はドアを開けて車から降り、官邸の門をくぐった。

するとそこにはすでに官邸にいた官房官や関係省庁の官僚で、ひつた返していた。

その光景を見ると、やはり大事件が起こったんだなという寒感が沸く。

「瀬戸川さん！」

立ち尽くしていた瀬戸川に声が掛けられる。

声がした方向を振り返ると、そこには一人のスースツ姿の女性がいた。

「今さつき着いたところですか？」

女性の名は飯井畠遙イイハタ・ハルカ

安塚内閣の看板娘にして少子化対策大臣、そして特別安全対策委員会委員長である。

特別安全対策委員会は今期より飯井畠の提案で設置された新たな組織だ。

その存在理由は対テロ戦予防対策や国内の大規模犯罪組織取締り、関係省庁の連携強化のための橋渡し的役割だ。

委員は警察庁、防衛庁、海上保安庁などの官僚と複数の国会議員か

ら構成され、かなり大きな権限を有しており非常時の際には各関係省庁に通達と命令を出すことができる。

飯井畠はそこでの最高意思決定権限者なのだ。

年齢は45歳だが外見は30歳前後に見えるほどの美人で、國民からの人気も多い。

しかし、みんなその外見から誤解しやすいが飯井畠は仲間内から「アマゾネス」と揶揄されるほどのタカ派、悪く言えば過激派である。今回の事件でもっとも早く行動を起こしたのも彼女だ。すでに彼女の命令により別室では特別安全対策委員会の緊急集会が行われていた。

「大変なことになりましたね。まったくイル・クムファは余計なことをしてくれたものです」

「ああ、まったくの同感だ」

瀬戸川と飯井畠は政治家として親しい間柄だ。飯井畠は瀬戸川の派閥に属しているし、瀬戸川は選挙のときに飯井畠に応援演説をしてもらっている。

年は離れているが、腹を割つて話せる仲だ。

「で、緊急閣議を開くんだろ？他の連中はどうした。もつきてるのか？」

「みんなもう閣議室にいますよ。総理とも連絡が取れます。あと

は瀬戸川さんだけ

「ビリッケツかい…まあいいわ、急ぎますか」

「ええ」

飯井畠もうなづいて、一人はせわしく動き回る官僚たちを尻目に官邸の閣議室へ急いだ。

総理と緊急閣議

200X年 10月14日 土曜日

日本時間午後7時30分

官邸の閣議室には内閣を構成する全ての国務大臣が召集されていた。

総務大臣

法務大臣

外務大臣

経済産業大臣

厚生労働大臣

農林水産大臣

国土交通大臣

財務大臣

文部科学大臣

環境大臣

内閣官房長官

防衛庁長官

沖縄及び北方対策担当大臣

金融大臣

少子化担当大臣兼特別安全対策委員会委員長

そして、

内閣総理大臣

計16人の国務大臣と閣僚が顔を並べている。

そしてその中にいる安塚首相は現在大韓共和国を訪問しているためパソコンのモニターからの参加となつた。

『それでは、諸君。全員集まつたようだから、緊急閣議を開始する
としよう』

スピーカーから安塚の声が流れ出した。

モニターに移る安塚の口の動きは声の速さに追いついていなかつた。

『みんなにも既に連絡が回つていてと思つが、本日未明にミサイル
と思われる飛翔物体が新潟市内に突入、着弾したことだ』

全ての閣僚達が全員、モニターに移る安塚の顔に熱心に視線を送り
続けた。

『新潟市内の何処に落ちたのか、死傷者などの詳しい被害状況は不明だ。今回の閣議は言つまでもない、この緊急事態、懸案にどのように対処するかを話し合いたい』

安塚が言い終わると同時に、経済産業大臣である篠山信二シノヤマ・シンジウが口を開いた。

『ミサイルと思われる飛翔物体と言いますが、それは確かにミサイルなのですか？そしてそうだとしたら、ミサイルが勝手に飛んでくることなどありえませんから、誰が一体何の目的で打つてきたんですか？』

篠山の疑問は当然のことだ。

「この疑問抜きでこの問題を論議する」ことは出来ない。

そして、その篠山の疑問に答えたのは防衛庁長官の黒田啓一^{クロダ・ケイジ}だった。

「そのことについては、確かな証拠はありません。ですが分析が進めば明らかになると思います。例えば着弾地点からミサイルの残骸が発見されるとか…それから、何処の国が打ったかということは、あれがミサイルかどうかということがまだハッキリしていない現段階ではまだなんとも」

黒田は慎重に、そして丁寧に話を進めたが、その流れを飯井畑が遮つた。

「北東共和国に決まっているわ。着弾の前にレーダーにはあの国の方角から飛んでくるのが確認されているじゃない。総理、これは東北共和国によるわが国への戦争行為です！宣戦布告ですよ！」

「アマゾネス」の怒号が響き渡る。

飯井畑の主張はここにいる閣僚達がうすうす気がつきながらも、向き合いたくない現実だった。

「ですが飯井畑さん、それはいさか性急な判断では？まだミサイルと決まったわけではありませんし…」

「じゃあ、何なんです？レーダーに確認された飛翔物質は時速4万キロで飛んでいたんですよ？これは北東共和国の保有していると思われる弾道ミサイルのカタログデータに一致していますが？」

飯井畑はアマゾネスのあだ名に負けず、一気にまくし立てた。

それは他社の反論を許さない勢いだった。

しかし、篠山も精一杯反論する。

「もしかしたら隕石かもしれないし……」

「隕石ですか？」の非常事態にJFE話ですか？

「……」

それはもはや意見交換ではなくただの一方的な言葉虚めに等しかった。

アマゾネスの勢いによって閣議室には何ともいえない苦い空気が漂つた。

安塚でさえ顔をしかめながら気分を悪くしているだけ。

しかし、安塚の右腕である内閣官房長官の雪野忠良ユキノ・タダヨシがそんな状況に一石を投じた。

「飯井畑さん。ならどうこう対応をとるべきだと？」

「決まっているわー報復攻撃よー」

雪野に聞かれて飯井畑が高らかに宣言し、その声が閣議室中に響き渡った。

その言葉を聴いて、飯井畠の横に座っていた瀬戸川が少し笑った。

再び雪野が口を開く

「それはできません。わが国は文明国であり法治国家です。相手が攻撃してきたという証拠もなしにこちらが攻撃するわけにはいきません」

「証拠なんてすぐに出してくれるわ」

「もしさうなつたとしてもまずすべきことは国連の安全保障理事会にかけることです。国際社会の承認なしに戦争行為はできません」

「国際社会の承認ですか？ 攻撃されたのは国際社会ではなくて日本よ！」

三度飯井畠の怒号が閣議室に響いたが、こんどは飯井畠と親しい瀬戸川が口を挟んだ。

「落ち着け飯井畠さん。これが国際政治なんだわ、仕方ないだろ？」「

「しかし」

「とにかく落ち着きなさい。悔しいのは分かるがね。雪野君の意見は正しいよ」

「……」

瀬戸川に諭されて、飯井畠はようやく大人しくなった。

閣議室のやり取りをモニター越しに見ていた安塚は安堵する。

安塚は飯井畠が苦手だった。

彼女を閣僚に抜擢したのは党内で強い影響力を持つ瀬戸川に進められたからだった。

彼女もそのことを知っている。だから彼女は首相である安塚よりも自分を推した瀬戸川を尊敬しているのだ。

瀬戸川の説得で飯井畠がすんなり大人しくなったのもそういうことだ。

『では、話を続けよう…』

と、その時。官房長官である雪野が再び口を開いた。

「すみません。少し待ってください。今、外から連絡がありました」

今度は何事かと、閣僚達の全員が雪野に視線を送る。

その視線を受けながら雪野は閣議室に備え付けられているテレビを点けた。

勘の鋭い閣僚なら、もうなにが起きたか悟っていた。

電源の点けられたテレビ画面には神妙な面持ちでカメラを睨むキャラスターが映し出されていた。

そしてやつくりとそのキャスターは口を開いた。

『臨時ニュースをお伝えします。今日午後6時ごろ、新潟市内で大規模な爆発が確認されました。爆発が起きたのは新潟駅周辺、死傷者などの詳しい情報は入っておりません。政府からは未だ何の発表もなく、ただ官邸周辺が活発に動いているとしか情報が入ってきておりません。今回の爆発がテロによるものかどうかは依然不明です。繰り返します。今日午後6時ごろ、新潟市内で大規模な爆発が確認されました。爆発が起きたのは新潟駅周辺、死傷者などの詳しい情報は入っておりません。ただ今は通常の放送予定を変更して特別ニュース番組をお伝えしています』

閣僚の誰かがため息をついた。

マスコミが報道したからには国中が大騒ぎになるだろう。

混乱収集という面倒ことが増えた。

そして安塚が言つ。

『……記者会見が必要だな』

記者会見といひよつとした仲間割れ

200X年 10月 14日 土曜日

午後7時50分

首相官邸の記者会見室には大勢の報道各社が詰め込んでいた。

皆一様にピリピリした表情をしている。

無理も無い、ついさっき新潟で事故にしては不自然な大規模爆発が確認されたのだから。

もしかしたら日本史上初の大規模爆弾テロかもしれないのだ。

非常事態ではあるがマスコミにとっては購買数をあげるまたないチャンスである。

記者達は緊張した表情の裏側にとんでもない政府発表を期待する商売根性を抱いていた。

そして、そんな記者達の前に政府のスپークスマンである内閣官房長官・雪野忠良が姿を現した。

雪野は会見室の真ん中に置かれてある会見台の前に立つと、書類を見ずに直接記者達の目を見て話し始めた。

「今日午後未明、新潟市内新潟駅周辺で極めて大規模な爆発が確認されました。この爆発が爆弾などの人為的なものによるのか、それとも事故であるかまだハッキリとはしておらず現在確認中です。現在政府はさらに詳しい状況把握に努めており官邸に危機管理室、及び対策本部と特別安全対策委員会を設けており事態の収拾に全力をあげております」

カメラ映りの良い雪野は淡々と、そしてはきはきと話を進めて行く。カメラ映りの良い雪野は淡々と、そしてはきはきと話を進めて行く。と、会見室にいた記者達から質問の声が上がった。

「爆発現場の近くにいた市民の証言では、なにか空を飛んでいた飛行物体が市内に突入したことですが? 今回の爆発事件が外国からの攻撃との認識はありますか?」

「複数の市民がミサイルらしき飛翔物体を目撃したと取材に答えているのですが?」

「……我々には今回の事件が外国からの攻撃であるとか、そういう報告はきていません」

「ですが複数の市民が目撃しているんです」

「そういう報告は聞いておりません。すみません、もう時間ですでの会見はこれまでにやせていきます」

まことに質問が出てきて、雪野は早々と会見室から退出しそうとした。

そんな雪野の背中に記者達から怒号にも似た質問が浴びせられる。

「今回の事件が外国からの攻撃だとされた場合、どういった対応を取られるおつもりですか？」

しかし、雪野は振り向きもせずに富邸の奥に引き返していった。

後を追おうとする記者達がドアに止められている。

別室ではその記者会見の模様を他の閣僚達がテレビ画面越しに見つめていた。

雪野が退室したところが映った後、画面はテレビ局のスタジオに切り変わった。

「しかし、マスクミも鼻がいいですね…」

テレビ画面に食いついていた経産相の篠山がため息交じりで言つ。

それを聞いて外相・瀬戸川は皮肉めいた笑みを浮かべながら返した。

「オウム事件と阪神大震災以来の大祭りになりそうだから、そりやマスクミも必死だわなあ。できる限りもりあげんと」

「祭りつて…瀬戸川さん、その言葉は不謹慎でしょう

篠山が眉をしかめるのを見て、これまた笑いながら瀬戸川が弁明した。

「あらま、失敬失敬。そういうつもりじゃなかつたんですね」

瀬戸川は笑つが、篠山はさらに不快そつた表情を浮かべた。

「一人は衝突」ではないものの、以前から馬が合わない仲だった。もともと篠山は東京の旧財閥である名家の出自で、父も外相を経験した元国会議員である。

いわゆる一世議員といふやつだ。

対して瀬戸川は三重の農家出身のたたき上げだ。もちろん父親は国會議員でもなんでもない農業経営者である。

二人は何かと相違点が多い。

馬が合わないのも当然だろう。

「他のテレビ局も、今のところ詳細不明と報道しているけど時間の問題ね」

テレビのチャンネルを回しながらそう言つたのはアマゾネスこと飯井畑遙である。

時間の問題と言つたのは北東共和国のことだ。

雪野は記者会見で詳しいことは分からぬと言つていたが今回の事件は北東共和国からのミサイル攻撃である可能性が高い。

マスク//ミサイルらしき飛翔物体の存在に感づいていたようだし、その飛翔物体と北東共和国からの攻撃と言つて一つのキーワードが結び付けられるのは時間の問題だろう。

そつなれば日本国内の世論は一気に加熱する。

報復攻撃に向けて…

「黒田さん。どうせ後々攻撃するんだから、今のうちに自衛隊に出動命令でも出しておいたほうがいいんじゃないですか？」

飯井畠はソファに腰掛けながら、薄ら笑いを浮かべて防衛庁長官の黒田に話しかける。

「それは首相の許可がないと…それに今この段階で世論を不適切に刺激するのはよくないでしょ？」

黒田は苦々しく笑いながらやんわりと飯井畠からの提案を拒否した。

しかし、飯井畠は続ける。

「別に首相の許可なんて必要ないじゃないですか。自衛隊が国家の非常事態に出動するのは当たり前ですよ。それに世論も刺激できるときには刺激しといたほうが、戦争になつた時に便利ですしね」

飯井畠はさも当然のように話をするが、飯井畠の言葉に篠山が反応した。

「いい加減にしてください飯井畠さん。わざわざから一体何を言つてるんですか！まだ攻撃かどうかはつきりしていないので、貴方は戦争でもしたいのですか！」

名家の出身で、普段は物静かな篠山が珍しく声を荒げた。

顔が少し紅潮している。

「ふざけた言動は慎んでください」

しかし、飯井畠は一步も引かない。

「私は実に真面目ですよ。篠山さんこそその戦争アレルギーをどうにかなさつたらいかがです?」

「飯井畠さん、あなたは戦争を望んでいるのですか?...?」

「望んでいるかは別として、恐れるものでは無い」と思っています

「貴方は戦争といつもののが何なのか分かつてない。戦争になれば数え切れない人が命を落とす」とになるんです」

「道徳の授業なんて聞きたくもありませんね。戦争なんてしょせん政治の一手段にすぎませんよ」

最初は薄ら笑いを浮かべていた飯井畠の顔も、いつの間にか真剣な政治家の顔になっていた。

篠山と飯井畠の間に険悪なムードが漂つ。

と、その時。一人の口論に口を挟むものが出てきた

「まま、お一人とも。今は争つてもしょうがないんじゃないですか?」

ひょうきんな笑顔で割つて入ったのは総務大臣の伊藤幸助イトウ・コウスケである。

彼はまだ36歳と若かつたが東大卒業の官僚出身といつキャリア組みだ。

安塚内閣の若い星である。

官僚出身にしては珍しく、堅物ではなくて飄々とした性格だ。

「総理もまだ戻ってきてない」とだし、ニュースで仲間割れはまずいでしょ、ね？」

明るい笑顔を振りまく伊藤の仲裁によつて飯井畠と篠山の口論は何ともいえない後味を残しながら、一人がお互に目線を逸らしたことによつて静かに幕を下ろした。

事態が何とか収集して伊藤はほつとした後、まだテレビのニュース画面を眺めている瀬戸川のもとに近づき、そつと小声で言った。

「飯井畠さんが暴走した時は、瀬戸川先生が止めてくださいよ……貴方が連れてきたんぢやないですか」

瀬戸川はまたしても笑いながら答える。

「一人はああいうのがいた方がいいんだわ」

その瀬戸川の反応を見て、伊藤はうなざりしたようにため息をついた。

このなかで最も影響力のある大物がこの調子なのだ。

「それよりも、ニュース見てみなさいよ。伊藤君」

「はい？」

瀬戸川に言われてテレビ画面に目を向けると、そこには凄惨な光景が映し出されていた。

テレビ局のカメラが爆発現場に到着したのだ。

そこには燃え上がる炎と群がる救急車、消火活動を続ける消防車に大勢の救急隊員が負傷者を運んでいるのが映し出されていた。

テレビのスピーカーからは傷を負つた人々のうめき声と隊員達の怒号が響き渡る。

そして画面の右下には、「死傷者最低で300人規模」との字幕が表示されていた。

200X年 10月 14日 土曜日

午後10時15分

新潟市内で大規模な爆発事件が起きた後、首相である安塚は残る訪韓の日程を全てキャンセルして緊急帰国の途に着いた。

今は大韓共和国首都カンジヨウの国際空港で日本政府専用機の離陸準備を待っている所だ。

待合室で安塚は日本のテレビ局が放送する新潟の被害現場の映像に食いついていた。

「なんてことだ……」

被害は予想以上だった。

ミサイルと思われる飛翔物体は時速4万キロのスピードを維持したまま買い物客と下校途中の中高生で溢れる新潟駅周辺に突入。

着弾と同時に大規模な運動エネルギーが強い衝撃波を生成し当たり一帯をなぎ払った。

アスファルトや駐車されていた車が破片となつて吹き荒れる。

その破片に多くの通行人が巻き込まれた。

重大な被害は着弾地点から半径300メートルまでだつた。

「死者は最低で百人は下りませんね」

安塚の秘書であり、側近の藤沢がため息を漏らす。

「予想以上に大事だぞ、これは…」

と、その時。テレビの画面がスタジオに切り替わる。

画面の中心に座るキャスターが興奮交じりにカメラを見つめながら口を開いた。

『えー、今回の新潟での爆発事件ですが…政府はテロであるとも事故であるとも断定しておりません。詳細は不明と雪野官房長官は記者会見で話しておりましたが、ここで今回の事件が「偶発的な爆発事故」ではなく、「人為的で意図的なテロ」であると断定できる証拠をわがエキスプレス・ニュースが入手しました』

「？！」

ニュースキャスターの思わず発言に安塚は身を乗り出した。

「どうこうことだ？」

驚愕する安塚にニュースキャスターが遠慮するわけも無く、番組は

そつをと次のステップに進んでいく。

安塚の横で、藤沢は慌てるわけでもなく冷静にテレビ画面に視線を送っていた。

『まずはこちらの映像をご覧ください』

キャスターが促すと、画面が切り替わる。

切り替わった画面は先ほどと同じく被害現場を映していた。しかし、先ほどの映像と違つて救助にあたる救急隊員の姿は無く、さらに画素が極めて荒かった。

それに音質も酷い。

『これは事件発生直後、現場に駆けつけた市民の方が携帯電話で撮つたものです。問題は次の場面です。そう、ここ、この場面です』

その場面は、撮影者が炎が立ちこめる被害現場に転がつてある鉄板の破片を映しているものだ。

『この鉄板です。焼け焦げていてよく判別できませんが、よく見てください』

画面が鉄板の破片の度アップに切り替わる。

そしてそこに映っていたのは…

『北東共和国のラウンデル（国籍マーク）です』

安塚は目を丸くした。

確かにそこには北東共和国人民軍が使用しているラウンデルがペイントされていたのだ。

つまりそれは…

『今回の事件が北東共和国からの攻撃であることを意味しています』

キャスターが決定的な結論を導き出した。

『すでにわがエキスプレス・ニュースが被害現場周辺で実施したインタビューに、多数の市民がミサイルらしき飛翔物体が市内に突入したのを目撃したと答えています。これらから察するに市内に突入した飛翔物体は北東共和国が発射したミサイルと思われます。ラウンドル付の鉄板は恐らくミサイルの残骸でしょう。つまり今回の事件は北東共和国による攻撃であると…』

「なんてことだ…」

安塚が顔を青ざめながら言つ。

「まあ、だいたい予測されていたことです」

藤沢はあっけらかんと受け流す。

対照的に安塚はかなり衝撃的な様子だ。

確かにこの結論は予測されていたし、緊急閣議でも飯井畑が声高に

叫んでいたことだ。

今更驚くには値しない。

しかしそれでも決定的証拠をさまざまと叩きつけられると、安塚にはショックだった。

安塚には少し纖細なところがあるのだ。

「さて、これからどうします？マスコミは狂乱すると思いますが…

「…とにかく、日本に着いたらまた緊急閣議だ。それから、…それからのことはどうについてから…だな」

安塚に元気は無かつた。

新任早々大事件に巻き込まれたのだから、無理も無いかもしない。就任以前から言っていたことだが、安塚は人気だけが先行した経験不足の政治家だった。

このプレッシャーに耐えるだろうか？安塚と長い間一緒に仕事をしてきた藤沢にも、それは不安なことだった。

藤沢は最も安塚の欠点を理解している人間の一人だ。

「総理。すぐに調子を取り戻していただかないとい…日本についてからもそれでは困ります」

「ああ…分かつてゐる。分かつてゐよ」

だがやはり、安塚に元気は無かつた。

中休みと登場人物紹介

登場人物がごちゃごちゃ増えそうなのでここで整理します。

話が進むにつれて整理・追加していきます

(設定だけで本編に登場しないキャラもいます)

【日本】

自由立憲民主党（与党）

・ 安塚宗次 慎重派
ヤスヅカ・ソウジ

新たに日本のトップに就任した若き総理大臣。
国民からの人気は高いが経験不足が指摘されている。
少々リーダーシップに頼りない所がある。

秘書の藤沢とは家族ぐるみの付き合い仲がいい。

・ 藤沢彰正 慎重派
フジサワ・アキマサ

首相である安塚の政策秘書。

冷静沈着で有能、常に総理である安塚をサポートする。
安塚よりも年上。もともとは安塚の父親の秘書だった。

・ 篠山信三 慎重派
シノヤマ・シンジウ

経済産業大臣。名家の出身でハト派。過激な行動を嫌う。
今回の事件に当たつては常に慎重な対応を主張してきた。

武力を嫌うがいまいちパツとしない。

- ・ 飯井畑遙 イイハタ・ハルカ 強硬派

少子化対策大臣にして特別安全対策委員会委員長。美人で評判だがアマゾネスと揶揄されるほど過激的。今回の事件で報復攻撃を強烈に主張した。安塚をあまり尊敬していない。

- ・ 瀬戸川恒雄 セトガワ・ケンイチ 強硬派

外務大臣。自由立憲民主党内で強い影響力を持つ大物議員。ある意味首相である安塚よりも実力者。

- ・ 雪野忠良 ユキノ・タダヨシ 中道派

内閣官房長官であり安塚の側近の一人。ルールに実直な現実主義者。

爽やかなお父さんといった風貌をしている。

- ・ 黒田啓一 クロダ・ケイジ 中道派

防衛庁長官。官僚出身で事務的な人物。いつも慎重に言葉を選んで話す。

- ・ 伊藤幸助 イトウ・コウスケ 中道派

総務大臣。安塚内閣最年少だがなかなかうまく振舞う。エリート官僚出身で気さくな性格。

- ・ 共生党（連立与党）
アイカワ・コウジ
- ・ 相川高次
?
?
?

国家社会主義党（野党）

ナナセ・カズヒサ

七瀬和久 ???

????

ハカヌマ・ショウタロウ
墓沼宗太郎 ???

????

????

内閣情報調査室

????

????

????

自衛隊

????

????

【北東民主主義人民共和国】

人民労働党（独裁政党）

・イル・クムファ ????

人民労働党総書記にして最高権力者。

今回の事件発生以降姿を見せなくなる。

人民軍

????

????

????

？？？

【大韓共和国】

- ・イ・ソンファ 慎重派

大韓共和国大統領。あまり日本と関係が良くない

【北アメリカ大陸合衆国】

- ・スティーブン・ウイルソン 中道派

北アメリカ大陸合衆国大統領。

戦争行為と不自然な動き

200X年 10月 15日 日曜日

深夜0時15分

死者126人・重軽傷者307人

事件発生から5時間以上経つて、死傷者の第一報が速報で流れた。

「けつこうな数じゃない」

飯井畠が無機質な声で感想を漏らす。

その横で篠山が暗い顔をしていた。

「どう? 篠山さん。ここまでいたら北東共和国からの攻撃だと疑いようはないわ。国民もだまつてないわね」

飯井畠が勝ち誇ったように言い放つ。

その言葉に篠山は暗い顔で答えた。

「確かにそうですね」

それから黙り込む。

その様子を見て満足したのか興味を無くしたのか、飯井畑は暗い顔の篠山を置いて部屋から出て行き特別安全対策委員会の会議が開かれている別室に向かつた。

その光景を横目で眺めながら、瀬戸川は隣にいた防衛庁長官・黒田に話し掛けた。

「こりゃ、大変なことになりますな。防衛庁も」

黒田は笑つて答える。

「それは外務省も同じでしょ?」

「ああ、まあそうですねけどな。とにかく自衛隊はどうするんです? 飯井畑君の言うとおり出動命令でも出しますか?」

「何を言つてんですか瀬戸川さん。前にも言つたようにそれは総理の命令が…」

「じゃあ、安塚君…いや、安塚総理がどう決断すると思つ?..」

「何でそんなことを聞くんです?..」

「いや、ちよつとね

瀬戸川が不自然に笑つのを見て、黒田がいぶかしがる。

「瀬戸川さん。まさか総理を疑つてゐるんですか？最長老の貴方がそんな調子では他が…」

「疑つてゐる訳じゃなくてさ、ちょっと彼にはそういうことがあるからなあ、と。彼には公務のときであろうと私事のときであろうとこつこつ危機的状況に陥つたことがないだろ？？」

だからちょっと心配してゐただけだよ

「……」

黒田は眉をひそめて瀬戸川を見つめた。見よが見よがは睨みつけているように見える。

だが瀬戸川は構わずに話を進めた。

「しかし、北東共和国も何を考えてんですかなあ。まさかホントに撃つてくれるとは、いよいよ開戦ですかな」

「……アメリカの通信傍受では人民軍総司令部が戦争準備命令を発令してたようですが」

「ほう。にしてはミサイル着弾から約5時間、あちらさんの報道機関も政府機関もいつさい声明を出してませんな。やけに静かだ」

「確かにそうですが、まだ不自然なことが

「ん？」

「ミサイル着弾の前日まで北東共和国人民軍の無線通信は通常どお

りに運営されてたそうです。

普通、戦争前夜の軍隊の無線通信というのは作戦が外に漏れないようシャットダウンされるものなんです

「作戦が外に漏れない自信があつたのかもしれんね」

「そうかもしませんが。個人的に北東共和国には戦争をする予定がないのかもしないと思います」

「ではなぜミサイルを?それに人民軍は戦争準備に取り掛かっているんでしょう?」

「ええ。しかし、それでも戦争を本気で考えている節が所々かけているのは事実です」

黒田の口から漏れてくる情報は確かに奇妙だった。

北東共和国がミサイルを撃つてきたことも、戦争準備に取り掛かっていたことも事実。

だがその後の動きが不自然だ。

ミサイルを撃つてきてから5時間たつても沈黙を保っている上に人民軍にも動きが無い。

一体北東共和国の指導者は、イル・クムファは何を考えて何を目的に行動しているのか?

いまいちつかめない。

「しかし、ま。連中のやつたことが戦争行為であるのは搖るぞの無い事実か…」

瀬戸川は苦笑いを浮かべながら言った。

それと同時に内閣官房長官の雪野が入ってきて、韓国から緊急帰国してきた安塚総理がたつた今羽田に到着したと伝えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0438b/>

戦争推理

2010年10月11日13時08分発行